

テモテ第一二章1-7節 「全ての人への祈り」

1A 祈りの勧め 1-2

1B 祈り方 1

2B 祈る対象 1

3B 祈りの実(敬虔さと威厳) 2

2A 全ての救いを願われる神 3-6

1B 祈りの性質 3-4

2B キリストの仲介 5-6

3A 宣伝者の任命 7

本文

テモテへの手紙第一二章を開いてください。2章からパウロは、牧会者に対する手紙にふさわしく、教会の公の秩序について話していきます。教会を監督する者に必要なのは、治める賜物です。教会の中に秩序が保たれ、平安と安心のうちに人々が主を礼拝できるように導く義務があります。また、教会が教会外の人々から良い評判を得なければいけません。主に対して熱心に仕えることが、信じない人々を嫌な思いにさせることはありません。生まれたばかりの教会の様子を見ましょう、使徒5章12-14節です、「また、使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行なわれた。みなは一つ心になってソロモンの廊にいた。ほかの人々は、ひとりもこの交わりに加わろうとしなかったが、その人々は彼らを尊敬していた。そればかりか、主を信じる者は男も女もますますふえていった。」ですから、教会内の秩序、そして教会外との秩序について、パウロは多くをテモテに指導します。

1A 祈りの勧め 1-2

1 そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。2 それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。

1B 祈り方 1

パウロは2章の中で、教会が公に行なう大きな務めとして第一に挙げているのが、「祈り」です。今日は1-7節を学びますが、次の話題の男女にある秩序の話でも、「男は、怒ったり言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい。(8節)」とあります。今、テモテの牧会する教会では、激しい論議をしている自称、律法の教師たちがいたので、なおさらのこと祈りを強調したのでしょう。

「まず初めに」と言っていますが、これは順番以上に、優先順位のことを意味しています。「祈る

ことを第一に務めてして行なっていこう」ということです。私たちの全体の教会生活において、このことを怠りがちです。あたかも、祈りが付け足しのように取り扱ってしまいがちです。祈りから始め、祈りで維持し、そして祈りで終わるような、神に対して私たちは奉仕しているのだ、という共同体であることを忘れてはいけません。使徒の働きで、使徒たちはこう言いました。「私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。(6:4)」祈りがあって、それから御言葉です。私もここで悔い改めなければいけないと思いましたが、御言葉があって、祈りを付けたしのようにしていく傾向があるからです。そしてみなさんも、ぜひ互いの祈り、それから私にも祈ってくださいという願いをしてください。

そして、祈りの方法について見たいと思います。「願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるように」とあります。この一つ一つが大事ですね。まず、二つ目の「祈り」から見たいですが、これは神に対して語りかける一般的な言葉です。私たちが自然にできること、けれども積極的にしていかなければいけないことは、神に語りかけることです。それは一つの礼拝行為です。主のすばらしさを眺め、この方のなされた業を思い起こします。約束を思い出します。そして、その恵みに応答して、主の前に自分の意志を明け渡すのです。こうした礼拝行為が祈りの中にあります。

そして、「願い」という言葉ですが、これは、必要と感じているものを、お願いすることです。自分の必要のために祈ることは、はしたないことではありません。私たちは、人にお願するのを遠慮しますが、その遠慮を神に対しても行なってしまうことがあります。いいえ、祈っていくうちに、神にその必要を知っていただくのです。そのことによって、神が近くにおられることを知ることができます。

それから、「執り成し」です。これは自分の必要ではなく、他者の必要のために祈ることです。ちょうどこれは、誰かが牢に入れられていて、その釈放のために、特赦を得るためにその人に代わって王の前に陳情に行くようなものです。おそらく、いろいろな祈りの中で、執り成しが最も忍耐、また戦いのある分野であると思います。パウロが、霊の戦いについて語っている時に、こう話しています。「エペソ 6:18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」

そして「感謝」します。これは簡単なようで、実は難しい祈りです。最も頻繁にしているのは、「願い」でしょう。また礼拝のような祈りも良くしていると思います。けれども、主がおられること、主が恵みを施しておられること、あらゆることに主が関わっておられること、これらのことを感謝するのは、一つの献身的な営みがあります。また、へりくだりも必要でしょう、「こんなこと受けていて当然だ」と私たちの肉は語るからです。いいえ、全て良きもので、主からいただいていないものはないのです。ですから、感謝を捧げます。

2B 祈る対象 1

そして、誰のために祈るかを見てみましょう。「すべての人のために」とあります。これが、パウロ

がこの箇所でも強調していることです。主は、すべての人の主であられ、またすべての人を救いたいと願われて来られた主です。ですから、私たちの知っている間の人々のために祈るだけでは、到底不十分であることをこの箇所は教えています。このような人は祈りが必要ないのではないか、と思われる人、また事柄についても祈っていきます。(Olive Life 誌にある、祈りリクエストを紹介。)ここでは、イスラエルのことが多く書かれていますが、その内容は、多岐に渡っています。教会に関わるだけでなく、社会的なこと、経済に関わること、政治や安全保障のこと、いろいろなことを祈りの課題に挙げています。日本の県庁所在地のことまで書いてあります！幅広い祈りが必要です、なぜなら、それは神の命令であるし、全てのことに関わり、関心を持っておられる神の御心だからです。

そして、日本人のことを考えてみましょう。福音に対して心を閉ざしていると思ってしまう、事実、福音を聞いて信じるという人は、百人いて一人いるかいないかであります。しかし、「お祈りさせてください」と話すと、未信者の人の多くが拒みません。自分が愛されているということを知ることができるので、また言葉の説得ではなく、霊や魂の領域であるということも無意識のうちに受け入れているのかもしれませんが。一度、「私クリスチャンなのですが、お祈りさせていただいていいですか？」と尋ねてみるといいかもしれません。

そして大事なのは、「また王とすべての高い地位にある人たちのために」とあることです。すべての人のために祈ることが大前提です。全ての人々が神にとって等しく、尊い存在です。けれども、王や高い地位にある人々のために祈ることは、その人たちの下す決断いかんによって、多くの人に影響を与えます。ここで大事な原則を読んでみましょう。ローマ 13 章 1 節を読みます。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。」王や高い地位にいる人々のために祈るということは、神の権威のために祈っているということになります。

ここで大事なのは、神からの権威だからといって、その人がいつも正しい判断をしているということではない、ということです。聖書に出てくる国の支配者は、良い支配者よりも悪い支配者のほうが多く出てきます。むしろ、主が王を立て、王を倒されますが、王を倒される時、その高ぶりのゆえに倒されることが多いです。そして、パウロがここで言及している「王」はローマ皇帝のことです。ローマ皇帝の行なったことで、悪いことは五万とあります。そして何よりも、彼らは神として、救い主としてあがめられていた、神格化されていたのです。そして、まことの神をあがめている者たちとしては、ローマ皇帝崇拝は当然ながら容認できません。

けれども、王のために祈りしないとパウロは勧めます。しかも、感謝をもって祈りなさいと勧めます。それは、彼が神によって立てられているからです。神の許しなしには、権威者はそこにいないからです。それは、良いことをしているということではありません。そうではなく、たとえ悪いことをしていたとしても、それでも神の不思議な御旨の中でその悪いことが用いられていることもある、と

ということです。主がすべてのことを働かせて、善としてくださる主権者であり、摂理を持っておられる方であります。ですから、私たちが理解できなくとも、今、この王が立てられている、だからその事実を感謝し、そしてその王のために祈る、というようにすればよいのです。ですから、私たちは政党政治、民主主義の中に生きていますが、自分の支持する政党に関わりなく、キリスト者ほどの首相ためにも祈ることができ、また祈るべきです。自分が社民党や民主党支持でも、自民党の安倍首相ために祈るのです。東京都に住んでいるのだから、舛添都知事のためにも祈ればよいのです。

もし、その手本を見たければ、ダニエル書を読まれるとよいでしょう。そこに横暴な王ネブカデネザルが出てきますが、ダニエルは彼のために執り成す人でした。そして、ダニエルが、ネブカデネザルに良い証しを立てているがゆえに、バビロン全体が大きな影響を受けている姿を見ることが出来ます。しかし、ダニエルも、彼の友人三人も、王を神とあがめるような行為には、静かにそれを拒んでおり、そして燃える火の炉に投げ入れられ、また獅子の穴に投げ込まれました。また、それらから救われました。このような迫害を通してさえ、こうやって王が立てられていることを信じ、敬うことによって、そうした彼らが神の証しを見て、まことの神をあがめるようになっているのです。

ここに、祈りの権威と力があります。私たちがどのような地位に召されているか、黙示録 1 章 6 節にこう書いてあります。「また、私たちが王国とし、ご自分の父である神のために祭司ととしてくださった方である。キリストに栄光と力が、とこしえにあるように。アーメン。」ここの「王国」は、単に「王」と訳すことができます。神の国において、キリストと共に統べ治める者、王とし、また人々と神との仲介者である祭司とされるのです。これが私たちの受けている召命であります。今、霊的にはこの権威と力、また務めが与えられているのです。「エペソ 2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」天のところに座らせてくださった、とあります。神の右の座に着いておられるキリストの内に私たちはいるので、私たちがそこに座らせていただいている、ということになります。

したがって、私たちがすべての人のために祈る時に、それは祭司的な、仲介者としての働きをしており、神の領域が祈りを通して人々に及んでいくということになるのです。権威の与えられている人々に対しては特にそうで、私たちが霊的な権威を祈りによって行使することで、神が人々や国々の動きに介入してくださるのです。

3B 祈りの実(敬虔さと威厳) 2

そして王のため、高い地位の人々のために祈ることが、2節を見ると一つの目的があります。「それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。」彼らのために祈る時に、敬虔さ、威厳さが培われます。先ほど読んだローマ 13 章 1 節の続きを読んでみます。「13:2-5 したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにもそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。支配者を恐ろしいと思うのは、良い行ないをするときではなく、悪

を行なうときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行ないなさい。そうすれば、支配者からほめられます。それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行なうなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行なう人には怒りをもって報います。ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです。」

どんな権威であっても、もしそこに権威者がいなければ無秩序になります。誰かが上に立たねばならぬのです。すべてが平等ということはありません、それを唱えることは自分自身が頭になりたがっているからそう言っています。秩序には、そこに善悪の基準があります。神は人が悪だけを行なって、無秩序になった人類を洪水で滅ぼされた後に、ノアに、「人の血を流す者は、人によって、血を流される。(創世 9:6)」と言われました。神が悪がはびこるのを抑制するために、剣を与える権威を国に授けておられます。例えば、私たちが近くにいる人を無差別にナイフで刺していけば、それは殺人ですが、その私を警官がピストルで撃って私を殺すのは、それは制裁です。神がその悪に対して、ご自分の裁きを与えられたのです。

このようにして、神の与えられている権威を通して、私たちは神に良心をもって従うこと、へりくだること、善を行なうことを学んでいきます。そこに立てられている人々のために祈ることによって、私たちの内に、敬虔さと威厳さが培われていきます。おそらく、今回のセレブレーションの大会で、武道館のために、その周りのために祈った人々は多かったでしょう。そこには、靖国神社がそばにあります。昭和記念館という建物もあります。靖国神社に行って反対運動をするのではなく、神の愛が伝わりますようにという、執り成す思いで祈ったことでしょう。敬虔さと威厳が養われます。

さらに、「平安で静かな一生を過ごす」とあります。これは、ローマ帝国の中で騒動もなく、その中で暮らすことができれば、次に出てくる神の救いの福音を人々に伝えることができます。「平安」というのは周りの環境であり、また「静かな」というのは、自分の平安な心の状態のことです。反乱を起こす分子がしばしばローマでは起こってきたので、敬虔な生活、威厳ある生活を送るのに妨げになるようなものが出てくるのを避けるために祈るのです。もちろん、キリスト者の信仰のゆえに、迫害が起こる時は起きます。けれども、私たちは自分に関する限り、人々と平和を保ちなさいと命じられています。迫害を私たちのほうで引き起こす必要はないし、引き起こしてはいけません。それは、迫害とは呼びませんね、争いを引き起こしていると言えるでしょう。

当時、不信者のユダヤ人はローマに不満を持ち、ついに反乱を起こしました。彼らはローマを変えたい、神の側に付かせたいという思いがあったことでしょう。しかし、起こったのはローマをかえって頑なにさせ、また自分たちの間で分裂、内乱が起こった事です。キリスト者はその中に加わりませんでした。そして、ローマに反乱を起こしませんでした。彼らは迫害を加え続けましたが、甘んじて迫害を受け、殉教しました。結果は、ローマの皇帝コンスタンチヌスがキリスト者となり、キリスト教が国教となったことです。これはこれで新たな問題が始まったのですが、キリスト者の勝利と

は、キリストがローマの十字架を背負われたように、権威に服することによって、その権威に勝利することなのです。

そこで私たちの教会が実感を持って祈れるのは、日本語学校のことではないでしょうか？たとえそこで働いている方々が未信者であっても、それでもそこを使わせていただいていることを感謝し、願い、執り成すことができます。そして、そこで私たちが平安に、静かに敬虔な生活を送ることができるようにされているのです。その範囲を、自分の職場環境においても、社会においても、国においても広げればよいのです。

2A 全ての救いを願われる神 3-6

1B 祈りの性質 3-4

3 そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

すべての人のため、また王や高い地位の人のために祈ることは、私たちが敬虔に歩めるだけでなく、神の救いがその人々にも及んでいくという効果をもたらします。テモテへの手紙で、ここがパウロの強調していることで、「私たちの救い主なる神(1:1)」という言葉から始め、「キリスト・イエスは罪人を救うためにこの世に来られた。」という言葉と話しています(1:15)。そして、ここでも「私たちの救い主である神」と言っているのです。

そして、これが「良いことであり、喜ばれること」と言っています。「良い」という言葉をパウロはこの手紙で多く使っていますが、これは、理屈抜きで、子供に対して親が教えるように、「このことは良いことなのだ」と神に言われているのです。歯を磨くことは良いことなのだ、とその時は分からなくても磨くのと同じです。私たちの知性はこれに反発する時があります。全ての人と言っても、祈りたくない人がいます。あるいは、無関心のため、なんで祈る必要があるのか？と思うかもしれません。このように、私たちは関心において幅をもうけ、壁を周りに作っているのです。しかし、そこには神の心はありません。神の心は、全ての人なのです。関心をお持ちで、その人々をも神が救いたいと願われているのです。執り成し、願い、感謝して祈る中で、理屈は分かりませんが、神の救いが広がっていくのです。

そして神が、「すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」という言葉で、全ての人を救われると言っていないことに注目してください。イエスの御名を呼び求め、この方を心に迎え入れなければ、その人は救われません。けれども、主は願いとして、全ての人を救いたいと願っておられるのです。主はあらかじめ、全ての人を彼ら自身が救いを願っていないことも知っておられます。その人は受け入れません、だから滅んでしまいます。けれども、その滅びを決して喜んでおらず、永遠の命を与えることを本当は望んでおられるのです。

2B キリストの仲介 5-6

5 神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。6 キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。

先に、私たちが祭司的な働きをする話をしました。神の救いを私たちが執り成すことによって、人々に及んでいくという話をしました。けれども、それはしんどい作業ではありません。私たちには、仲介する力はありません。しかし、すでに仲介者がおられ、この方の中で執り成すことによって、効果ある仲介を果たすことができるのです。それが、「人としてのキリスト・イエス」であります。この方は神であり、かつ人であります。神は唯一ですが、仲介者も唯一です。神と人をつながれる方はキリスト・イエスしかいません。他に救いの道がある、ということは存在しないのです。不動産では、ある物件に対してもしかしたら複数の不動産が仲介のルートを作っているかもしれませんが、天という不動産はイエス・キリストの仲介のみによって得ることができます。この方が執り成しておられるのですから、私たちが執り成しの働きに、この方の力によって加わることができます。

そして、次は私たちは関わることの一切できない、仲介の働きですが、「贖いの代価として、ご自身をお与えになりました」というところです。罪の贖い、あるいは罪の身代金の支払いと言ってよいでしょう。自分が罪に売られてしまいました。けれども、キリストがその血によって、その代価によって私を買い取ってくださいました。こうした仲介を果たしてくださいました。この罪の贖いは、昔から啓示されていたことであり、旧約時代にもあったのですが、完全な罪の赦しとして、キリストによって実現したのです。

3A 宣伝者の任命 7

7 そのあかしのために、私は宣伝者また使徒に任じられ、私は真実を言っており、うそは言いません。信仰と真理を異邦人に教える教師とされました。

神がおられ、仲介者であるキリストがおられ、そしてこの贖いの働きを証する宣伝者と使徒がいる、ということです。神の救いの方法を、キリストにあって定められた方は、それを知らせる方法も定められました。それが、一つは「宣伝」あるいは「宣べ伝える」ということです。それは本質的に、説明ではありません。私たちの言葉で説得するものではありません。宣言です。権威が与えられ、それを宣言することによって、相手が聞いて、信仰をもって従うかどうかであります。さらに、「使徒」とありますが、これは「遣わされた」という意味です。イエス・キリストの権威によって遣わされている、使節、大使ということです。ですから、自分のいる行動範囲から越えて、他のところに行って、そこで福音を宣言するのです。今でいうなら、宣教師であります。

福音の内容を私たちが変えてはいけないうのと同じで、福音を知ってもらう方法も神に定められており、変えることのできないものです。「人に伝えることは、どうもはばかれる。押しつけがましいと

思われるのではないか。」と感じるでしょう。また、「他のところにまで赴いて伝えるなんて、そこに
いる人々が何とかすればいいじゃないか。」と感じるかもしれません。この前も、アメリカ人がわざ
わざ武道館まで来て、何にし来たんだ？ということになります。しかし、主は方法を変えておられな
いのです。福音は宣べ伝えるものであり、そしてその福音を足を使って運ぶのです。そしてパウロ
は、「教師」ともされています。神のご計画について説き明かします。

さらに、彼は異邦人に教える教師とされた、と言っています。彼自身はユダヤ人なのですが、異
邦人も律法を守ってユダヤ教徒にならなくても、神の国に入れる、御言葉を聞いてそれを信じる信
仰によって心がきよめられ、救いを得ることができる、ということを教えていました。他に、ユダヤ人
に福音を伝えたペテロがいましたが、異なる召命を受けていました。このように、全ての人に神は
救いを持っていきたいと願われていますが、もちろん実際に足を運ばせるのは、それぞれ召命を
受けた人々です。けれども、それぞれがその分を果たしているものであり、すべての人を救いたい
と願われる神のご計画の中に入っているということを思い出してください。